

生まれる生まれる

寺方南小学校 二年 山本 悠真

「こんなにたまごを口に入れてはれつしないの。大じょうぶなの。」

ぼくは、この本を読んでそう思いました。

この本をえらんだのは、魚が大すきだからです。しゃしんを見てすぐドキドキしました。

どんなお話かと言うと、ほとんどの海の魚は、きけんからまもるためにおとうさんがたまごをまもります。でも海の中にはそうじゃない生きものがいます。それでもぶじにそだつようと、いっしょうけんめいです。そうやって赤ちゃんは生まれてくるお話です。

ホシカゲアゴアマダイは口の中にたまごをたくさんくわえてまもります。ぼくはびっくりしました。どのくらい口の中にいて、いつ口の中からでてくるだろうと思いました。そして、おとうさんはたまごを口の中に入れてのまないのか、大きくなったたまごを入れてはれつしないのか、とふしぎに思いました。

また、「タコのおかあさんは死んでしまう」と言う文しようがおどろきました。タコは一生にいちどしかうまないからびっくりしました。そして生まれてきた赤ちゃんたちを見おくってしまいます。魚はすぐにしなないけどタコだけずにしぬからふしぎに思い

ました。ぼくはおかあさんにこう言いました。

「なんで魚はいっぱいうんで人げんはすくないん。」

「ほんとだね。おかあさんもわからないからしらべて教えてよ。」

そう言われました。

今、ぼくのおかあさんのおなかにあかちゃんがあります。10か月おなかの中にいて大きくなってぼくにあいにきます。また、ふしぎに思いました。魚と人げんはそだてかたがちがいます。なぜだらけです。海の中のお話だったけど、りくにいるどうぶつたちのこともしらべて、おかあさんに教えてあげたいです。

「せんそうをやめた人たち」をよんで

金田小学校 二年 小西 菜香

わたしは、「せんそうをやめた人たち」というお話を読みました。なぜこの本をえらんだかというと、だい名がどうしてそうなったのか気になったからです。

この本は本とうにあったお話です。

あらずじは、せんそうをしているイギリスとドイツのわかいへいしたちがサッカーをすることによってなかよくなって、せんそうをやめるというお話です。

わたしが一ばんころにのこったところは、イギリスぐんがドイツぐんに大きなこうげきをするときに、じゆうをすこし上にむけ、うってしらせるところです。

なぜかというと、そのままつぼうをうたないで、おともだちになったあいてをきずつけないようにしたのがやさしいとかんじたからです。

このお話をよんで、せんそうというものはとてもむなしなものだと思いました。

このへいたいさんたちのように、みんなとなかよくできれば、せんそうもなくなると思うから、わたしもそう思いました。

この本の一ばんさいごのページに、せいさくノートという文しよがあつて、そこには

この本を書いていると中にロシアがウクライナにせんそうをしかけたと書いてありました。

この本のさくしやはせんそうすることよりもつよい、人のやさしさとそうぞう力がえがきたくて本をかんせいさせたようです。

この本のお話であつたように、あいてへのおもいやりややさしい気もちがあれば、今でもせんそうはおわらせられると思います。